W-1

評価的意味と文法現象

企画者：堤良一

発表者：大江元貴・岩男考哲・堤良一・西村英希

1. はじめに～評価的意味

本ワークショップでは、次のような文の、下線部を施した表現に生じる意味を「評価的意味」と名付け、これを研究対象とすることの意義について検討する。以下、本ワークショップで扱うデータをいくつか見て、評価的意味とは何か、評価的意味を帯びる形式の特徴に少し触れ、各発表の概要を示す。(1)-(4)が各発表のデータ、(5)はこれらの形式が持つ特徴である。各形式は、本来、「限定」(1)、「並列」(2)、「集合／属性の指示」(3)、「対象の叙述」(4)をそれぞれ本務とするが、これらの例ではそれぞれ「皮肉、非難、肯定的いぶかしさ」とでもいうような意味を帯びる。

(1) 彼は夏休み中論文を読んでばかりいた。（大江発表）
(2) 「きみには，視えるようだな。その真実とかいうものが」（岩男発表）
(3) （相手の服を指して）そんな服、買ったんだ。（堤発表）
(4) a.她　有点儿　漂亮（西村発表）
　彼女　ちょっと　きれい（彼女、なんか素敵だなぁ(質)）
　b.她　漂亮　一点
　彼女　きれい　ちょっと（(他の誰かと比べて)彼女の方がちょっときれい(量)）
(5) a. 話者のきもち（怒り、苛立ち、失意、皮肉、不快、非難、驚き、肯定的いぶかしさ等）を表す。
　b. 当該の形式の元々の意味は a.を表すものではない。

先行研究ではこれらは、「卓立的提示」（天野 2001）、「感情・評価的意味」（鈴木 2006）、「低評価」（中俣 2016）などと呼ばれてきた。本ワークショップは、これらを「評価的意味」と称し、それが生じる形式の発掘、メカニズムの解明を目指すものである。さらに、評価的意味は日本語以外の言語にも見られるのかについて、中国語を例に考える。これらを通じ、評価的意味の研究の意義を提唱し、今後の研究の活性化へとつなげることを意図するものである。

なお、天野(2020: 33)は、岩男(2019)を紹介する中で次のように述べており、本ワークショップは、このような研究の流れの中に位置づけられるものである。

(6) 「近年、様々な言語表現についての発話者の「評価」的意味が指摘されるようになった。異なる現象の「評価」的意味に関する横断的な考察が今後期待される。」

2. 評価的意味を帯びる形式

どのような形式が評価的意味を帯びるかについては、我々の知る限りまとまった考察はなされていないようである。本ワークショップで提示する形式は(7)のようなものである。また、(8)のようなものも評価的意味を帯びると思われ今後の研究が期待される。これらは網羅的なものではなく、今後の研究によりその数、種類を増やしていくことが期待される。

(7) 本ワークショップで扱う形式
～わ～わ、～ばかり、～がち、～とか、～とかいう、そんな N、疑問文、有点儿(ちょっと/なんか)～
(8) その他の形式
～という N、呼びかけ、指示詞（岡﨑・衣畑他（編）2018）、～ときたら（岩男 2019, 2021）、「来る」等、求心的移動を表す動詞（久保田 2015、夏 2017）、授受表現、……

これらの形式には、ある種の複数性、反復性、集合といったような概念で説明される形式であるという共通点がある。このことは、偶然なのであろうか（移動を表す形式については岩男 2021 も参照）。

3. 本ワークショップの構成

以上のことを出発点として、本ワークショップは次のように構成される。

①大江発表：「反復的観察と評価的意味」

評価的意味の発生に関わる認知的基盤と構文的基盤について検討する。「反復的観察」という心内行動が関わっており，この心内動が評価的意味の機縁となっていることを指摘する。

②岩男発表：「複数性と評価的意味」

引用形式と物事が複数であることを示す形式が結合してできる表現を主な考察対象とし，それらに共通して評価的意味が生じ得ることを確認する。評価的意味が生じる原因には，複数という概念が関与していることを指摘する。

③堤発表：「確定性・指示性と評価的意味」

本来は集合を指示する形式が評価的意味を帯びることを観察し，これらの形式が唯一的なモノ・コトを指示することと評価的意味の関係について論じる。

④西村発表：「非明言と評価的意味」

日本語の「ちょっと」と「何(なん)か」が,中国語では「有点(儿)」という一つの形式によって担われている状況を概観する。次に,「有点」内部における「ちょっと」から「なんか」への客観から主観,量から質といった意味の変遷を観察する。

各発表で挙げられていない参照文献

天野みどり(2020)「文法（理論・現代）」『日本語の研究』7: 29-36, 日本語学会
久保田育美(2015)「タイ語の「maa」の意味拡張－日本語の「来る／てくる」を手がかりに－」『日本語・日本文化研究』25:112-121, 大阪大学大学院言語文化研究科
岡﨑友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太（編）(2018)『バリエーションの中の日本語史』くろしお出版
夏海燕(2017)『動詞の意味拡張における方向性－着点動作主同士の認知言語学的研究』ひつじ書房